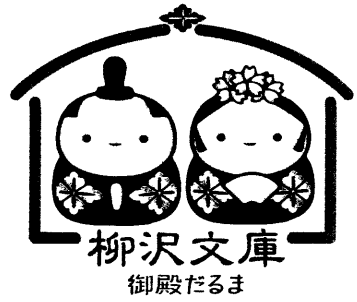


柳沢文庫秋季特別展

# 柳澤信鴻とその時代

松平美濃守  
源信卿奉見  
着風折中為人  
清秀舉正敬謹



柳沢文庫秋季特別展解説資料  
柳澤信鴻とその時代  
開催期間 2011年10月1日(土)～12月15日(木)  
(財)郡山城史跡・柳沢文庫保存会  
〒639-1011 大和郡山市城内町2-18  
TEL 0743-58-2171  
<http://www.mahoroba.ne.jp/~yngbunko>

## 2011年 柳沢文庫秋季特別展

### 「柳澤信鴻とその時代」

#### ごあいさつ

平成23年度秋季特別展では、柳澤信鴻(のぶとき、伊信<これのぶ>、享保9年<1724>～寛政4年<1792>)を文人大名としてだけでなく郡山藩主として史料に基づき位置づけるとともに、信鴻の生きた18世紀後半の社会について郡山藩領や大和国を中心に紹介することを目的とします。

本展示では信鴻の藩主としての事績を紹介し(藩主時代は延享2年<1745>～安永2年<1773>)。信鴻は、和歌・俳句、絵画など様々な文芸に秀で、観劇好きでもあった文人大名として知られています。一方、信鴻の郡山藩主としての事績についてはあまり知られていません。しかし信鴻は朝鮮通信使を郡山藩京屋敷近くの本圀寺(ほんこくじ)で接待する役にあたり、桜町院の葬祭の警固として京に詰めるなど公務面でも活躍した大名であり、展示資料を通じてその実像を明らかにします。

信鴻が藩政にあたった時期は、社会の大きな転換期とされる宝暦・明和期(1751～1772年)でした。洪水・干魃などにもなう不作で飢饉が頻発するなか、財政難に苦しむ大名は対応に苦慮しました。

大和の各地同様に郡山でも一揆が勃発するなど社会の動揺が進む一方、郡山城下では紺屋町(こんやまち)で株仲間が結成され、春岳院や町人によってかつての郡山城主豊臣秀長を祀る大納言塚の修復が行われるなど、様々な面で新しい動きが確認できます。本展示では、こうした社会の新しい動きを紹介するとともに、信鴻や家臣達がどのように対応しようとしたのかという点にも踏み込んで明らかにします。

財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会

#### 1. 朝鮮通信使の接待

江戸時代、朝鮮国王は江戸幕府の主である大御所および将軍に修好や慶賀の名目で使節を派遣しました。これを朝鮮通信使といいます。今回は徳川家重の將軍就任を祝うために通信使が遣わされました。延享5年(1748)、信鴻は、幕命によって京屋敷近くの本圀寺(ほんこくじ)に宿泊する使節の接待にあたりました。通信使はやがて京都を出発し、郡山藩領の近江国醒ヶ井を經由して江戸へと向かいました。なお朝鮮通信使の一人は、柳澤信鴻について「為人、清秀・挙正・敬謹」(ひととなり、せいしゅうにしてきよせい・けいきん)と評し、信鴻の清楚で礼儀正しく謙虚な様子を記録しています(軍官洪景海「随槎日録」)。

展示開催にあたって、石澤雄一郎・上田長守・渡辺辰江・和田與吉郎、永慶寺・橿原市立図書館・柏原宿歴史館・河合町教育委員会・河合町立図書館・京都市歴史資料館・京都大学文学研究科図書館・京都府立総合資料館・広陵町教育委員会・広陵町立図書館・郡山八幡神社・滋賀大学経済学部附属史料館・実相寺・春岳院・東京都江戸東京博物館・福應寺・宝山寺・大和郡山市教育委員会をはじめとする関係各位には大変お世話になりました(個人、寺社・機関の順序で50音順、敬称略)。心より感謝申し上げます。また上記以外の多くの方々にも、展覧会開催にあたっての調査のため、大変お世話になりました。お礼を申し上げます。

なお、展示の解説中の人物については敬称などを省略しております。ご了承ください。

展示品1「幽蘭台年録」(朝鮮人饗応一件 上)延享4年(1747)4月9日条

展示品2「幽蘭台年録」(朝鮮人饗応一件 下)延享5年(1748)5月2日条

「幽蘭台年録」とは、柳澤信鴻の公的記録(全157冊)です。これは、祖父柳澤吉保の「楽只堂年録」、父吉里の「福寿堂年録」に次ぐ量になります。延享2年(1745)10月から安永2年(1773)まで、つまり信鴻の家督継承から隠居に至るまでの時期を収めます。信鴻の事績の中で通信使の接待は特に大事な行事と認識されていたようで、特別に「朝鮮人饗応一件」と書かれたものが上下2巻にまとめられています。展示品1は延享4年に信鴻が通信使の接待を命じられた場面から始まります。展示品2は京都本圀寺を訪れた朝鮮通信使に信鴻の家老平岡里普が歓迎の言葉を述べた場面などが書かれています。

展示品3「松平美濃守日誌」延享5年(1748)5月朔・2日条

「松平美濃守日誌」は、柳澤信鴻自筆の日記です。収録期間は、元文3年(1738)より明和4年(1767)までで、延享2年(1745)に家督を継承する以前、いわゆる若殿時代から安永2年(1773)に隠居する数年前までの時期を収めます。信鴻が延享5年5月2日に通信使を接待したスケジュールだけでなく、本圀寺で接待する前日に通信使への礼儀作法(「揖礼」(ゆうれい))を練習している様子も記されています。

参考 パネル展示

「通信使淀城下着到図」延享5年(1748)(渡辺辰江氏所蔵、京都市歴史資料館寄託)

延享5年(1748)、大坂から船で淀に到着した通信使の行列が淀城へ向かう様子を描いています。川御座船から絵図中央の唐人雁木(とうじんがんぎ)朝鮮通信使が上陸する棧橋)に接岸し、城下をまわって淀城に入りました。筆者は、淀藩士渡辺善右衛門守業(元禄14年<1701>~宝暦12年<1762>)です。渡辺家の当主は代々善右衛門を称し、淀藩主稲葉家の家臣でした。善右衛門は大変筆まめな人物で、多数の随筆を残しました。延享5年の通信使来航に際しては、通信使饗応役を勤め、その見聞記は詳細を極めます。

「朝鮮人来聘記」(渡辺辰江氏所蔵、京都市歴史資料館寄託)

淀藩士渡辺善右衛門が、延享5年の朝鮮通信使の饗応役にあたった際の応

接準備の過程を記したものです。淀藩が準備に勤しんでいる様子が描写されていますが、郡山藩など饗応に関わった他藩の動向も載せています。郡山藩は京都での接待のために「ぶた百疋」を購入しようと長崎へ向かいました。淀藩も豚10匹が必要であると書かれ、長崎で入手を計ったと考えられます。このように通信使に饗された料理の中には豚が含まれ、材料は主に長崎から調達されました。

「朝鮮人来聘附図」(渡辺辰江氏所蔵、京都大学文学研究科図書館所蔵謄写本)

淀藩士渡辺善右衛門が描いた、朝鮮通信使の行列図の写です。パネル展示の箇所は、朝鮮国王から大御所徳川吉宗・将軍徳川家重にあてた国書を携えた使者の行列、通信使の正使(洪啓禧)・副使(南泰耆)の行列です。

「増補再版京大絵図」(京都市歴史資料館所蔵)

林吉永の刊行による、木版手彩色の京都の絵図です。絵図中には「寛保元年(1741)の作とありますが、内容より延享3年(1746)頃の刊行とみられ、信鴻の藩主時代と重なります。この2年後に信鴻は通信使を本圀寺(ほんこくじ、現在は京都府京都市山科区)で接待します。絵図によると、壬生寺(みぶでら)からみて南東に郡山藩の京都屋敷と本圀寺が所在しています。

## 2. 桜町院の葬祭の警固

郡山藩主は代々京都の警固をその重要な職務としています。天皇や院が崩御した際には葬祭において、郡山藩は葬祭の警固を勤めるならわしでした。

寛延3年(1750)、天皇在位中に大嘗祭や新嘗祭など重要な朝廷儀礼を復活させた桜町院が崩御しました。信鴻は、京都の火の番に加えて葬儀や中陰仏事が行われる泉涌寺(せんにゅうじ 京都市東山区)や般舟院(はんじゅういん 京都市上京区)の警固の控(予備要員)も勤めました。

展示品4「幽蘭台年録」寛延3年(1750)5月12日条

寛延3年4月、桜町院の崩御に際して、泉涌寺と般舟院の警固の控(控ひかえ)、京都火の番を信鴻が勤めるようにとの幕命を京都所司代松平資訓(すけくに)が命じた史料です。信鴻はこの年参勤交代で江戸に向かう予定で、信鴻と入れ替わりに国元に戻る予定であった膳所藩主本多康恒に役を引き継ぐ

く国元に留まり、京都の火の番の勤務のみを継続しました。

#### 展示品 5 「桜町院様於般舟院諸寺・諸山御焼香次第」寛延3年(1750)

(大和郡山市教育委員会蔵豊田家文書)

本文書は柳澤家の家臣であった豊田家に伝来した古文書です。内容は、桜町院の中陰仏事において焼香や納経の儀式に参列した大寺院を列挙しています。各寺院への御布施も記入されています。大和国の寺院としては興福寺や法隆寺、東大寺がみえます。豊田家も葬祭の警固に参加した可能性があります。

#### 展示品 6 「太上皇桜町院御葬儀」寛延3年(1750)

桜町院の葬儀に関する記録です。展示品5「桜町院様於般舟院諸寺・諸山御焼香次第」が、中陰仏事に参列する諸寺院を列挙するのに対し、本史料では桜町院や、葬祭の会場となる寺院の説明、そして葬祭を警護する大名などを記しています。般舟院の警固には、近江国水口城主(滋賀県甲賀市)の加藤佐渡守明熙(あきひろ)、泉涌寺の警固には丹波国亀山城主(京都府亀岡市)松平紀伊守信岑(のぶみね)らが当たりました。なお信鴻は般舟院固(かため)などの任をすぐに解かれ、京都で火の番にあたったためか、本書には現れません。このように院・天皇の葬祭には、近畿地方の譜代諸藩で在国している大名達が活躍しました。

#### 展示品 7 「麒麟曲輪絵図」(大和郡山市教育委員会蔵豊田家文書)

郡山城の天守郭の西にある郭、麒麟郭(きりんくるわ)を描いた絵図です。絵図には御霊屋(みたまや)が描かれ、柳澤家の歴代の祖霊が祀られていたと考えられます。柳澤信鴻の日記をひもとくと、国元にいる記事にはしばしば麒麟郭に参詣するとみえます。柳澤家の当主は、しばしば御霊屋にお参りしていたのでしょう。同じく絵図には稻荷神社もみえます。このように、麒麟郭は柳澤家にとって信仰の場所でした。現在、麒麟郭の跡地には、奈良県立郡山高等学校城内学舎が所在しています。

### 3. 信鴻の元服・家督継承など

ここでは信鴻の名前の変遷や、元服・家督継承・隠居・葬送などの節目にあたる出来事をご紹介します。

#### 展示品 8 「実名仮字附」

柳澤吉保の父より、柳澤保光までの柳澤家一族を中心に実名と読み仮名を記したものです。信鴻が「のぶとき」と読むことや、義稠(ともあつ)・信卿(のぶあき)・伊信(これのぶ)と度々改名していることがわかります。

#### 展示品 9 「福寿堂年録」元文4年(1739)10月28日条

「福寿堂年録」は信鴻の父、柳澤吉里の公的記録です。「福寿堂年録」には家督を継ぐ前の「若殿」時代の信鴻に関する記述も含まれています。元文4年、柳澤信鴻(当時は義稠 ともあつ)が元服しました。家老平岡普里が元服で髪を整える理髪の役を勤めています。なお「袖留(そでとめ)とは振り袖を普通の袖の長さに縮めることを指し、「額直(ひたいなおし)とは前髪の額の角の髪を剃り、角前髪にすることを意味します。

#### 展示品 10 「幽蘭台年録」延享2年(1745)10月20日条

延享2年、父である柳澤吉里(「甲斐守」)の死去に際して幕府の老中酒井忠知(ただとも 後の忠恭 ただずみ)・本多忠良(ただよし)より信鴻(当時は義稠)が家督継承を認められたことが書かれた史料です。なお、信鴻は江戸城に登城した際には「帝鑑之間」詰(ていかんのまづめ)を命じられました。これは城主で譜代格の大名の席次で、信鴻の妻輝子の実家信州松代真田家も同様でした。

#### 展示品 11 「隠居奉願候覚」安永2年(1773)9月

柳澤信鴻が持病などのため、藩主としての公務を勤めがたいとして、嫡子保光(やすみつ)に家督を譲りたい旨、幕府に申請した史料です。時に信鴻50歳でした。宛所の末尾に見えるのは、当時権勢を誇っていた田沼意次(おきつぐ)です。隠居後、信鴻は「松平美濃守日誌」に代わって「宴遊日記」を記し、

江戸の文化を満喫し、風流な生活を送りました。

#### 展示品 12 「即仏心院様御葬送申合帳」 寛政4年(1792)3月

「即仏心院様」つまり信鴻の葬送に関する史料です。寛政4年3月に信鴻は死去しました。江戸での葬儀に際しては、信鴻の前妻幾子・後妻輝子の実家に当たる伊予宇和島藩主伊達村候(むらとき)・信州松代藩主真田幸弘(ゆきひろ)が警固の人数を添えました。これは、信鴻生前の両家との親密な関係に基づくものでした。

## 4. 信鴻を支えた家臣

信鴻の政治を実際に担ったのは、家老を中心とする藩士達でした。ここでは、柳里恭(りゅうりきょう 正式には柳澤里恭)、石澤信敬、藪田重守、松平甫矩らの活動を紹介します。

#### 展示品 13 「曾禰氏系譜」

曾禰氏の系譜を記した史料です。曾禰(そね)氏は、戦国時代に甲斐武田氏に仕えた家で、柳澤家とともに武川衆(むかわしゅう)という武士の集団を構成しました。江戸時代中期には柳澤家に仕え、柳澤家より「柳澤」の名字を許され、家老などの要職に就きました。信鴻の時代の曾禰氏は、柳里恭(りゅうりきょう)で宝暦3年(1753)には大寄合の地位にありました。里恭は、柳澤淇園(きえん)としてもよく知られ、江戸期の南画の先駆者の一人でもありました。

#### 展示品 14 「白鷗居士深志之報」 寛保元年(1741)4月

(大和郡山市教育委員会所蔵豊田家文書)

#### 展示品 15 「永廟御実録」 元文5年(1740)仲秋(8月)成立

展示品 14 は、藪田重守(やぶたしげもり 白鷗)の死去に際して、信鴻がその奉公の労を報いた書状です。書面では、信鴻の祖父柳澤吉保に仕え、吉保の事績を四巻の書物にして信鴻に献上したことが特記されています。信鴻は祖父吉保の事績に敬意を示すと共に謙虚に自身はその跡を追っていくことが

できるだろうかと藩主としての気負いを吐露しています。なお、重守の著した書物の写が展示品 15 の「永廟御実録」です(原本は大和郡山市教育委員会所蔵豊田家文書)。展示品 15 の末尾には寛保元年(1741)、重守の後継者藪田市正邦守(いちのかみくにもり)が江戸の「若殿」信鴻に展示品 15 の原本「永廟御実録」を献上したことが記されています。

#### 展示品 16 「石澤家事績」(石澤雄一郎氏所蔵)

柳澤家の家老を代々務めた石澤家の事績を記した古文書で、今回初公開されるものです。石澤家は柳澤吉保に仕えて以来、柳澤家に重用された家でした。本書でも信敬が柳澤吉里の時代から仕え、宝暦11年(1761)に家老に任命されたことがわかります。また明和元年(1764)には信鴻(当時は伊信)の「信」の一字を拝領したことが記されます。

#### 参考 パネル展示

#### 「万留帳」 明和4年(1767)10月19日条

(滋賀大学経済学部附属史料館寄託、柏原共有文書)

「万留帳」(よろずとめちょう)は郡山藩領であった近江国坂田郡柏原(かしわばら 滋賀県米原市)の宿場の史料です。この史料では信鴻の治世に、柏原の宿場で人足の負担「歩役」をめぐって村内で大きなもめ事が発生しており、ついには郡山の法廷で当事者達を審議することになりました。「大勢」で騒動を起こして往還を妨げたとされる「牢舎人・宿預ケ」の者達の尋問が行われたことが書かれています。この時、家老石澤信敬は月番の年寄達とともに裁判の場に臨んでいます。

#### 展示品 17 「幽蘭台年録」 寛延3年(1750)10月28日条

柳澤家の家臣が9月に二条城火災に際して消火活動を行ったことで褒賞として刀などを授けられたことが記されています。前月の8月には火災で二条城の天守閣が焼け落ちるなど、火災への警戒が厳重にとられていた時期でした。なお、以後二条城の天守閣は再建されませんでした。

家老松平但見甫矩のみが刀だけでなくその拵(こしらえ)を拝領しているように、甫矩が藩兵を率いて活躍したことが窺われます。但見家は徳川綱吉の

命令で柳澤吉保の家臣となった家です。以後、幕末まで柳澤家の当主の信頼厚く、様々な勲功を立ててきました。「松平美濃守日誌」では甫矩が家老に就いていたことが確認でき、しばしば日記にも登場します。このことは、家老のなかでも特に信鴻が信頼を置いていたことを示唆します。

#### 展示品 18 「京都火之御番方御用心留帳」 延享 4 年(1747)10 月 11・16 日条

この史料は郡山藩家老家の松平但見甫矩が京都で郡山藩の火消の職務にあたった際に書き留めた日誌のようなものです。火災が発生しますと、甫矩は郡山藩の火消の 1 番・2 番の藩士とともに現場に駆けつけ、消火にあたりました。なお、郡山藩は 11 月に丹波篠山藩(兵庫県篠山市 藩主は青山忠朝<ただとも>)と火消しの役を交代しました。

#### 〈信鴻の絵画〉

#### 展示品 19 「芍薬小禽図」 明和 2 年(1765) 4 月

小鳥と芍薬(しゃくやく ボタン科の草花)を描いた花鳥画です。花鳥画は動勢をもつ動物と不動の自然物である植物などが主題となります。「明和乙酉孟夏画於和州寧楽幽蘭台 華陽源伊信」の賛と「伊信」・「信卿」の 2 印があります。「松平美濃守日誌」の明和 2 年(1765) 3 月 27 日条によると「芍薬ノ絵ニカカル」、同 4 月 4 日条に「芍薬画半蔵へ遣ス」と記され、「芍薬ノ絵」が本画に当たると考えられます。信鴻の絵画の制作期間が 1 週間足らずと知れる点でも貴重な絵画です。

#### 展示品 20 「牡丹錦鶏図」 明和 2 年(1765) 7 月

本画では色鮮やかな牡丹の花と錦鶏(きんけい、美しい羽をもつキジ科の鳥)を中心に描いています。本作品は明和 2 年 7 月 16 日に永慶寺の第 3 代住職である楚石に贈られました。信鴻は、2 週間前の 7 月 2 日に著名な画家伊藤若沖(じゃくちゅう)の「牡丹画」を入手しています(以上、「松平美濃守日誌」)。中国明清花鳥画の影響を受けた若沖の細密で濃厚な彩色手法を信鴻も参考にしている可能性があります。

#### 展示品 21 「山水図」 明和 7 年(1770) 秋

「明和第七庚寅秋抄写口／南京郡山太蘭室源伊信」とあり、明和 7 年に郡山で信鴻が描いた作品です。信鴻が隠居・出家した後には山水図を書いていることは知られていますが、本作品より藩主時代にも山水図を書いていたことがわかります。

#### 展示品 22 「御家中屋敷小路割名前図」 宝暦 4 年(1754)

宝暦年間の郡山城と武家町および城下町の様子を描いた絵図です。絵図の軸の貼紙 2 枚によると「宝暦四戌年正月改之／御家中屋敷図」、「宝暦四戌年二月改之／御家中屋敷小路割名前図／本屋敷替或名改折々理替可申事」とあります。すなわち、宝暦 4 年の正・2 月に作成された絵図で、屋敷の持ち主が変更された場合、また持ち主は同一でも名前が変わった場合には上申に基づき訂正したものです。郡山城図には、郭などの名称を簡潔に記しただけのものと、家臣の屋敷を記したものとに大きく分けられます。本絵図は後者ですが、屋敷の所有者に関する何らかの変更を丁寧に記し、場合によっては貼紙を貼っている点に特色があります。家臣の所在地を実地に示す資料として重視されていたと考えます。

## 5. 城下町の動向

ここでは信鴻の藩政時代における郡山城下の動向を紹介します。郡山八幡宮の正遷宮、紺屋町の紺屋仲間の仲間規定の強化、大納言塚の修復などです。これらの動きは、郡山藩と全く無関係というわけではありませんが、町民がそれぞれ担い手となって活躍したことに特色があります。

#### 展示品 23 「幽蘭台年録」 明和 7 年(1770) 8 月 17 日条

明和 7 年 8 月、郡山八幡宮の造営があり、正遷宮がなされたことが記されています。正遷宮とありますので、社殿の造替などがあったのでしょう。信鴻は家臣を通じて金二百疋を奉納しています。なお安永 2 年(1773)には、中絶していた神輿の渡御の儀式が行われました。神輿は八幡宮を出て大坂口西南の御旅所に向かいました。城下の町々は檀尻(楽車 だんじり)を出し、子